

# 詩をみる・よむ・つくる

## ～主体的にテキストと向き合う学習活動～

### 1. 授業概要

コンクリート・ポエトリーは具体詩や具象詩とも訳され、言葉の視覚的・聴覚的な面を強調することで、新たな言語表現の可能性を追求しようとした前衛的实践です。1950年代以降国際的な運動となりましたが、北園克衛とともに日本におけるコンクリート・ポエトリーの運動を牽引した詩人に新国誠一がいます。新国は、コンクリート・ポエトリーについて、意味の伝達を目的とするのではなく、言葉の物質性そのものに鑑賞者を向き合わせる「原初経験」をもたらそうと述べています。(注1)。

コンクリート・ポエトリーの起源としては、19世紀を代表するフランスの詩人ステファヌ・マラルメがしばしば取り上げられますが、日本の近代詩史のなかにも言語の視覚的・聴覚的な面を捉えた実験的な実践として、山村暮鳥、高橋新吉、萩原恭次郎、春山行夫、草野心平などの諸作品が存在します。これらの作品は、コンクリート・ポエトリーを先取りする先駆的な試みとして注目されます。

今回の授業実践「詩をみる・よむ・つくる」は、これらの作品を取り上げて、作品の主題や作者の内面ではなく、言語の視覚的・聴覚的な側面に焦点を当てることで、言語表現の可能性を押し広げ、生徒たちの言語観や文学観を活性化させようとする試みです。

また、そのために作品の解釈にとどまらず、創作活動を取り入れました。コンクリート・ポエトリー創作の授業実践としては、高校における児玉忠氏の試みがあります。児玉氏はコンクリート・ポエトリーを「意味の視覚化」として捉えた上で、「授業でのねらいはあくまでも「自己表現」になるので、そうした自分の内面世界をどう視覚化するのかにウエイトをおいた」と述べています(注2)。今回の授業実践は、内面重視の「自己表現」ではなく、聴覚面を含めたより自由な「自己表現」をめざしました。その上で、自分の作品が鑑賞者にどのように受け取られたのか、それをあらためて自分の作品の評価にどのようにつなげるのかに着目しながら、創作活動をめぐる生徒相互のコミュニケーションを重視しました。

(注1) 新国誠一「空間主義東京宣言書」(『ASA』3号 1968年10月 初出『新国誠一works 1952-1977』思潮社 2008年12月 所収)  
(注2) 児玉忠『高等学校 文章表現の授業』(溪水社 1977年4月)

### 4. 授業の展開[全4次・3時間] 《紫:読み手として、緑:書き手として》

#### 第1次

- ① 詩2篇をみて、題名を考える→題名を付けた理由を書く WS No.1  
・草野心平 A:「天気」、B:「冬眠」

#### 第2次

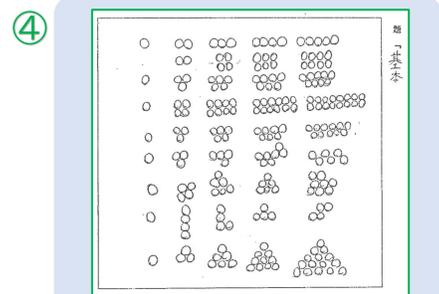
- ② 詩12篇(①でみた詩2篇を含む)をみる WS No.2・No.3  
③ ②でみた詩のうち2篇をよむ  
・草野心平 E:「おれも眠らう」……クラス全員で音読  
・新国誠一 L:「作品ポ」……指名した一人で音読

#### 第3次

- ④ ②・③の詩を参考にして、詩を1篇つくる WS No.4 上段  
条件:テーマは自由だが、題(タイトル)は必ず付ける  
⑤ つくった詩について、「どの詩を参考に、どういう意図で創作したか」を書く WS No.4 下段 [■]

#### 第4次

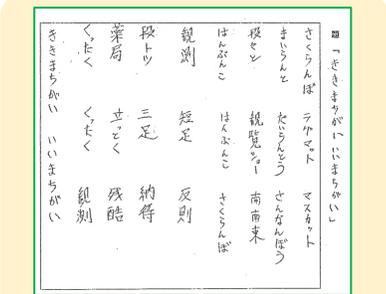
- ⑥ ④でつくった詩をみる→詩へのコメントを書く[2~3名分] WS No.4 下段 [▲]  
⑦ ⑥で書かれたコメントを読む→つくった意図と合わせて読み、感想や気づきなどを書く WS No.4 下段 [□]



⑤ ■丸はすべての形の基本で、世界にいっぱいあるから、丸がすごいことを伝えたかった。

⑥ ▲丸が少しの規則(かたまり)を持って並んでいるので視覚的に面白いし、きれいだ。点字のようにも見えるので、目が見えない人と見える人をテーマにしているのかもしれない。けれど「基本」なので、この形に意味があるのかなと感じた。丸が世界の根本にあって、そこから文字のような文明が発達したということかな。  
▲規則性がありそうでない「○」の配置がおもしろかった。縦と横で「○」の集合の位置はそろっているが、その形がそれぞれ違う。  
▲はじめは全て規則があると思っていたけど、どんどん分からなくなっていて、○の配置も様々な種類があって面白い。

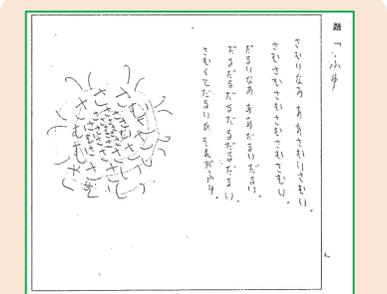
⑦ □あまり深く考えずに書いてみたけれど、みんなおもしろい考え方で、丸の規則などを見てくれてうれしかった。



■「作品ポ」(を参考にした)。響きが似ている言葉を集めて、日常にある聞きまちがえ方や言いまちがえ方を作品にしました。

▲文字のテンポがいいから、ついつい声に出して読みたくなる詩だと思いました。日常で実際にありそうなことで面白かった。  
▲リズムカルで読んでいて心地がいい詩だと思った。また、題である「きまぢがひい いまぢがひい」が、最後にそれすらもきまぢがひい、いまぢがひいであるという意味がわかるのが面白かった。  
▲私はラップも苦手な人でもありません。ですが、作者はラップが上手な人かもしれないと思いました。

□自分は特に気にしていない、意味を持たせ流記はなかった最後の「きまぢがひい いまぢがひい」に意味を感じている人もいて、人それぞれ、作者も考えていなかった考え方があって、本当に面白いと感じました。



■新国誠一さんの「う・む」を参考に「ふゆ」をテーマにつくりました。その名の通りふゆのさむさとだるさを「う・む」のように続けて言うことで、クスツと笑ってしまうようなところを意識してつくりました。

▲同じ言葉を何度も使うことによって、とても強調しているなと思いました。そして、左の円では外側に「い」をたくさん置いていて、それにより独創的なデザインになっているなと思いました。  
▲なんか、パツと見た時に面白いデザインだなと思った。そむいとだるいを言いたいんだなあと思った。あと、「さむくてだるいひ」はわかります！ あえてひらがなにしていることで幼さを感じられて、より良いということを感じていました。  
▲「さむい」が連続で並んでいると思えば、「さむ」が連続で並んでいたり、左に書かれている円も「さむい」が並んでいると思いきや、「い」がたくさん並んでいた!! 予測ができずに読めるところが面白かったです。

□思っているより好評で嬉しかったです。また、自分の意識して書いたところや、思いが詰まっているところをみんな褒めてくれていて、気付いてくれたんだと嬉しかったです。

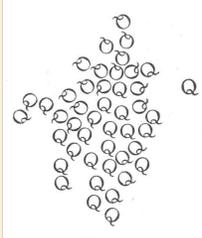
### 2. 授業の目標 ※今回は「テキスト=詩」とする。

- ア 読み手としてテキストを鑑賞する際に、その型、題材、視点などといった表現の特質や技法に気付くことができる。  
イ 書き手としてテキストを創作する際に、読み手として得たものを活かして詩を創作することができる。  
ウ 創作したテキストに対する他者の意見を通して、自身の創作活動を客観視し、ふりかえることができる。

### 3. 用語の定義 ※今回は「テキスト=詩」とする。

- 「みる」 テキストを視覚に入れ、眺めることで、事物の存在などをとらえる。  
「よむ」 (1) テキストをみて、その意味・内容を理解する。  
(2) テキストを一字一字声に出して言う。  
「つくる」 テキストを新しく創造し、文字や図に書いて表わす。

#### ① A 生徒が考えた題名とその理由(一例)



・「悩み」…QがクエスチオンのQだと考えたから。  
・「人が持つ疑問について」…人は様々な方向性で色々な疑問を持つ。それをいろいろな向きをバラバラにみているQで表現したのではないかな。  
・「無重力」…Qが散らばっているから。もしQが並んでいたらとすると、それがバラバラになることが起こったのかなと思ったから。  
・「唯一無二」…Qが一つだけ離れている。一つだけ大きい。可哀想にも見えるが、かっこよく見える。一つだけ、他とは違う感じがする。同じ方に向いていない所も、自分を持っている感じ。  
・「兵庫」…時計回りに90°してみると兵庫に見える。  
・「情報」…大きな右の「Q」が情報のもとでこれが伝わっていくうちにバラバラになっていっているのかなと思ったから。

#### B 生徒が考えた題名とその理由(一例)



・「抵抗」…白色が黒色に支配されそうになっていて、それに抵抗しているように見えたから。  
・「孤立」…白い紙の下にただ一つの黒丸があって、それがすごくひとりぼっちになってしまった時のような孤独感と、孤立してしまって先がおもいやられるような感じで見ていて、自分も寂しくなってきたから。  
・「はじまり」…ここから何かが始まり広がっていきそうだから。  
・「深夜」…深夜は黒くて、人が活動していないで、一人な感じがするから。  
・「個性」…白いシンプルな、周りに黒点がない空間で、一つの黒点が目立つようにあるから。  
・「夢」…夢を追っているときは、この世界にそれしか見えていないことがあるから。

②

	作品名	作者※1	視覚に訴える	聴覚に訴える	“よむ”ことができるか※2
A	「天気」	草野心平	○	×	エ
B	「冬眠」	草野心平	○	×	オ
C	「春殖」	草野心平	○	○	ア
D	「Nocturne. Moon and Frogs.」	草野心平	○	×	オ
E	「おれも眠らう」	草野心平	○	○	イ
F	「露臺より初夏街を見る」	萩原恭次郎	○	△	ウ
G	「日比谷」	萩原恭次郎	○	○	イ
H	「大地」	新国誠一	○	△	エ
I	「戀」	新国誠一	○	△	エ
J	「う・む」	新国誠一	△	○	ア
K	「闇」	新国誠一	○	△	エ
L	「作品ポ」	新国誠一	△	○	ア

※1 草野心平 [1903-1988]、萩原恭次郎 [1899-1938]、新国誠一 [1925-1977]  
※2 ア「ことばとしてよめる」  
イ「ことばとしてよめるが、作品の全体像はよめない」  
ウ「個別には文字として認識できるが、ことばとしてはよめない」  
エ「個別には文字として認識できるが、文字につながらない」  
オ「文字でない」

### 5. 授業の成果と課題

#### 成果

- ◎生徒は、「新たな詩との出会い」により、詩という文学ジャンルが持つさまざまな特性に気付くことができていた。  
◎生徒は、他者が創作した詩に対するコメントや、自分が創作した詩に対する他者のコメントを通じて、客観視による分析の重要性に気付くことができていた。

#### 課題

- ◎テキストを「みる」「よむ」「つくる」際に必要な用語(術語。特に詩の表現技法)や、コメントする際に必要な文章の型について、指導者の説明や指示の不足があったため、文章表現についての個人差が大きかった。